

平成25年度 下半期

バリアフリー推進 ワークショップ

第6回

平成25年9月27日(金)

テーマ 発達障害者のニーズを踏まえた支援技術開発

第7回

平成25年10月31日(木)

テーマ 発達障害における当事者研究の現状について

第8回

平成25年11月28日(木)

テーマ すべては「楽しい」のために
～結果としてのユニバーサルデザイン～

第9回

平成25年12月13日(金)

テーマ 日本のバリアフリーは世界の非常識？
～日本と海外のバリアフリーを比較して～

第10回

平成26年2月14日(金)

テーマ 東日本大震災と被災地の障害者

平成26年3月



公益財団法人

交通エコロジー・モビリティ財団

Foundation for Promoting Personal Mobility and Ecological Transportation

第 6 回勉強会

1 概 要

- 1.1 日 時：平成 25 年 9 月 27 日（金）18：00～20：00
- 1.2 場 所：エコモ財団 第一会議室
- 1.3 テーマ：発達障害者のニーズを踏まえた支援技術開発
- 1.4 講 師：田中文英氏（東京大学大学院情報理工学系研究科
ソーシャル ICT 研究センター 特任准教授）
- 1.5 コメンテーター：熊谷晋一郎氏（東京大学先端科学技術研究センター 特任講師）
- 1.6 参加者：25 名
- 1.7 講演概要：

これまで取り組んできたロボット工学の応用研究である人間とロボットのかかわりについてお話いただきました。

平成 24 年度から 28 年度まで実施する新学術領域研究「構成論的発達科学」が構成論、人間科学、当事者研究から成り立っており、特に当事者研究においては、障害者が自身を研究題材とすることで学術的な発展と回復効果が見込まれている。さらに、既存の学術分野と連携を図ることで、新たな展開が見込まれている。例えば、「発達障害者は感覚運動情報のまとめあげのプロセス過程において、障害があるのではないか」という仮説を立て医学や心理学等から検証しているが、始まったばかりの研究であり、成果はまだない。

さらに、ロボットの製作技術である空間知覚技術（音源推定、地図作成、行動プランニング）や認識技術（顔検出、人物認識、音声認識、音声合成、自然言語対話）が、発達障害者に対する支援技術の開発に役立つ可能性がある。また、ロボット技術を活用した脳波のみで動かすことができる車椅子の開発も進んでいる。

今後、ロボットはあらゆる機能を統合する技術を開発することで、教育や療育などの分野で活躍できる可能を示唆されました。

1.8 コメント及び質疑応答

【コメント】

熊谷氏 : 発達障害、特に自閉症スペクトラムは社会性の障害と言われている。発達障害以外の障害においては、「〇〇の理由があるから社会参加できない。」と言われる。例えば、車椅子使用者であれば、段差があるから社会参加できないということになり、段差解消にエレベーターを設置すればよい。しかし、発達障害は社会性の障害とされているため、対応が困難になってしまう。社会性が何を指すか具体的ではないし、社会性という言葉でまとめられると対応を考える入口が閉ざされてしまう。

田中先生をはじめとするチームの研究は、ソーシャルなロボットを本気で製作すること、つまり人間に近いロボットを製作していく過程で社会参加するための要素がわかる可能性がある。

事例にあったように発達障害とロボット製作過程における共通点が多々ある。例えば、音源定理ができない、内臓音がうるさい（音のフィルタリングができない）、表情認知ができない、音声認識ができない等が挙げられる一方、社会参加するための様々な要素について解明できれば、発達障害のバリアフリー化ができる可能性がある。さらに、その要素をまとめあげすることも重要となる。

つまり、ロボット工学は、発達障害のバリアフリー化のヒントを与えるだけでなく、同時に支援技術も開発することが可能である。

【質疑応答】

質問者 1 : 人間とロボット、発達障害者とロボットのかかわりとして、人間の行動パターンを統計的に判断し、最適な行動を行うための研究はどうなっているのか。

講師 : 人間とロボットのかかわりの研究は、ここ 10 年程度で行われており、理論はまだ構築されていない。現在は、点としての知見を見出している段階であり、心理学的なアプローチも徐々に加味され始めている。

質問者 2 : 視覚障害者も音源定理ができず外出できないとの問題があるが、音をコントロールする研究はどのようになっているのか。

講師 : 補聴器を利用し、指向性を高める研究を行っているが、個人差が大きいいためフィッティングが難しい。可能であれば、人の声／アナウンスの音のみを拾い、

その他の音を除去できる技術あればよいが、未だ至っていない。

質問者 3 : 各技術要素を統合するための研究はどのようになっているのか。

講 師 : 体系化された統合する技術はない。各メーカーの製品製作の過程において、その都度パッケージングを行う際に様々な技術を統合することで成立している。

2 配布資料

次のとおり。

3 参考情報

構成論的発達科学－胎児からの発達原理の解明に基づく発達障害のシステムの理解－

URL : <http://devsci.isi.imi.i.u-tokyo.ac.jp/>

社会的認知発達モデルとそれに基づく 発達障害者支援システム構成論

A02計画班代表 長井 志江(大阪大学)

2013年5月18日 第1回領域全体会議

構成論的発達科学



A02班の研究概要

社会的認知発達の構成論的理解と支援システムへの応用

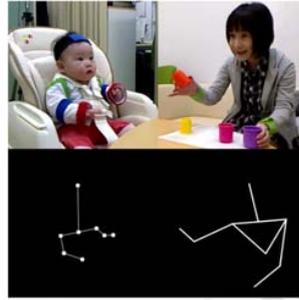
感覚運動情報の
まとめあげ



発達に合わせた
適応的応答

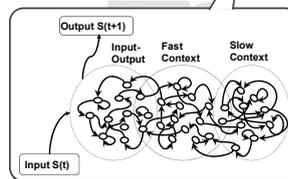
(1) 乳幼児—
養育者イン
タラクション
の定量的解
析

計測技術の提供
発達障害の早期発見
(B01, B02)



(2) 情報のまと
めあげによ
る認知発達
のモデル化
とロボットに
よる検証

発達の個体・環境要因
の構成論的理解
(A01)



(3) 発達原理
を応用した
情報のまと
めあげ支援
技術の開発



発達障害者の
コミュニケーション支援
(C01)

A02班メンバー

代表		長井 志江	大阪大学・工学研究科・特任准教授 研究統括, 乳幼児—養育者インタラクションの定量的解析と情報のまとめあげ発達過程のモデル化, 及び発達障害者支援システムの構築
		田中 文英	東京大学・情報理工学系研究科・特任准教授 乳幼児—ロボットインタラクションの実現と発達障害者支援システムの構築
分担		尾形 哲也	早稲田大学・理工学術院・教授 神経回路モデルを用いた乳幼児の認知発達のモデル化
		吉川 雄一郎	大阪大学・基礎工学研究科・准教授 マルチモダリティ間の整合性に基づく乳幼児の認知発達のモデル化
		西出 俊	京都大学・白眉センター・特定助教 神経回路モデルを用いた乳幼児の空間知覚機構の発達過程のモデル化
連携		浅田 稔	大阪大学・工学研究科・教授 社会的相互作用をととした認知発達の理論体系化
		高橋 英之	大阪大学・工学研究科・特任助教 乳幼児—ロボットインタラクション実験のサポート

第 7 回勉強会

1 概 要

- 1.1 日 時：平成 25 年 10 月 31 日（木）18：00～20：00
- 1.2 場 所：TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター カンファレンスルーム 7D
- 1.3 テーマ：発達障害における当事者研究の現状について
- 1.4 講 師：綾屋紗月氏（東京大学先端科学技術研究センター 特任研究員）
- 1.5 コメンテーター：熊谷晋一郎氏（東京大学先端科学技術研究センター 特任講師）
- 1.6 参加者：25 名
- 1.7 講演概要

「発達障害」における基礎知識、特にコミュニケーション障害の問題点を抱える自閉症スペクトラムについて解説するとともに、当事者研究の手法や成果、また発達障害当事者団体の活動についてお話いただきました。

【熊谷さんによる解説】

発達障害とは、自閉症スペクトラム（ASD）、注意欠陥・多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）を総称した名称であり、今回は自閉症スペクトラムを中心に解説いただきました。また、impairment（インペアメント）と disability（ディスアビリティ）の違いですが、障害学では障害を 2 段階にわけて考えています。impairment は当人の持つ身体特性、disability は当人の身体状況と社会環境との間に生じる齟齬です。しかし自閉症スペクトラムは、診断基準の中に社会性に関する記述が含まれており、「disability の impairment 化」が生じていると言えるのではないかと思います。

さらに、自閉症スペクトラムの診断件数はこの 15 年で 10 倍以上に増加しているが、impairment レベルでの増加であるかどうかはわからず、impairment の増加以外の原因として、人々の認知の広がりや、診断基準の変化など社会文化的な環境上の変化が指摘されています。ただし、両親の出生年齢の高齢化など、impairment レベルの増加の原因も多少は報告されています。

また近年、さまざまな分野の研究成果としてわかったことは、自閉症スペクトラムは千差万別であること。具体的には、遺伝要因の多様性、神経解剖学的な多様性、臨床像の多様性が報告されています。

これからの当事者研究の取組みとしては、自閉症スペクトラムについての概念を、

impairment と disability の区別やカテゴリ内部の多様性に気を付けながら再構築することであり、一人ひとりの経験・体験からボトムアップに記述することが必要であると指摘されました。

【綾屋さんによる講演】

「自閉症スペクトラム」と診断名がついて安心した部分もあるが、「社会性／コミュニケーションの障害」という診断基準には納得していない。なぜなら、例えば聴覚障害であれば、聞こえないという身体特性 (impairment) がまずあり、それによって、社会と関わる際にコミュニケーション障害 (disabilities) が生じている、と2段階で障害をとらえている。しかし、自閉症スペクトラムは「社会性／コミュニケーションの障害」が診断基準となっているため、どこまでが当人の変わることができる点で、どこからが社会環境が変わるべき点なのかを、区別できない状況にあるからだ。

そこで綾屋さん自身が当事者研究を進めるうえでポイントとしたのは、①「社会性の障害」「コミュニケーションの障害」からは出発しない、②「自閉症スペクトラムとは何か」ではなく、個々人の体験を言い当てる言葉を探る、の2点でした。例えば綾屋さんには、身体内外にある数多くの情報が次々と意識に届けられ、たくさんの感覚情報を処理できず苦しくなる「感覚飽和」が生じるそうです。道端の枯れ葉の気持ち悪い模様をアップで見えてしまって驚いたり、ファミレスのようなにぎやかな場所で周囲の話し声や BGM などすべての音が同じボリューム感で聞こえてしまったりすることで、不調を引き起こしてしまうこともあるそうです。他にも、時として視覚情報が部分的であり、全体像をとらえることができず、多くの他者との認識のズレが生まれることもあれば、何かの行動を起こそうとする時、自分の意志とは無関係に想起された他者像に、乗っ取られるような感覚になってしまうなど、様々な問題を抱えています。しかしながら、当事者研究を行うことによって困難を言葉にし、人と共有できるようになることで「自分の軸」が生まれ、とても生きやすくなったそうです。また人との関係においても、他者との適度な距離を保てるようになってきたと感じているとのことでした。

現在、綾さんは、Alternative Space Necco (ネッコ) という団体のフリースペースで、月2回、Necco 当事者研究会を開催しています。この団体では、発達障害者の雇用促進や精神保健福祉士による相談事業、当事者によるピアサポートなどを行っています。このような発達障害者コミュニティで当事者研究をすることによって、個々人が抱く問題点を共有し、研究を進めているそうです。例えば一言で『コミュニケーション障害』と言っても、より詳細に見ていくと、「周囲の音がシャットアウト

できず相手の声が聞き取れない」人もいれば、「興味のあるときだけハッとして集中力を発揮できるが、それ以外の時は基本的にぼんやりしている」ため、多くの人と同じようには周囲の情報をキャッチしておらず、他者との齟齬が生じている人もいる、など、一人一人の特徴が見えてくるとのことでした。

このように、発達障害者が抱える問題について当事者研究することで、個々人の状況を整理し、構造を見出し、「自分の問題」なのか、「社会の問題」なのかを切り分け、「自分の軸」を見定めていくことを目指しているそうです。

1.8 質疑応答

質問者 1 : Necco 当事者研究会の参加者はどのような構成か。また、継続的に参加しなくなった人がいるようだがその原因はなにか。

講師 : 1 回あたりの参加者の半分ぐらいがリピーターであり、残りの半分は新規あるいは定期的な参加はしない人である。Alternative Space Necco では就労支援も行っているので、就職すると参加しなくなることがある。

質問者 2 : 発達障害の特性で得することはなにか。

講師 : 私の場合は絶対音感を兼ね備えていたり、ジグソーパズルが得意だったり、詳細を良く覚えているので探し物を見つける際に役立ったりするが、それは困難と表裏の関係なので、得をしているとは言い難い。

質問者 3 : 発達障害の診断基準はどのくらいの期間なのか。

コメ : 個人差はあるが、成人であれば 1 年以内、子どもであれば数年かかることがある。これは、成人は肉体的、精神的にも成長が終わっているため、子どもからの成育歴で判断が可能だが、子どもは成長段階であるため、判断をしきれない部分が残るためである。

質問者 4 : 発達障害者は音を苦手としているためスーパーなどの騒がしい空間が苦手と聞くが、他にはどのような空間が苦手なのか。

講師 : 確かに多くの発達障害者が聴覚に関する困難を抱えているが、大きな音が苦手な場合や、音の反響が苦手な場合など様々である。よって苦手な場所についても個人差が大きい。

質問者 5 : 公共施設や駅、電車内などの音サインはどのように感じているか。

講 師 : 電車内でのアナウンスが大きすぎると感じる当事者は多い。個人的には新幹線ホームにある階段付近のピン・ポーンの音量が大きく、体を刺すような音質なのでつらい。さらに、スピーカーが真上にあると首を押さえつけられるような感じがするためつらい。

質問者 6 : 他の音を遮断するイヤーマフの使い勝手はどうか。

講 師 : 私の場合、イヤーマフは使いやすい。ノイズキャンセリング機能のあるヘッドホンは、逆に気持ちが悪くなってしまった。

質問者 6 : 音楽はどのように感じるか。

講 師 : 私の場合、音楽を聴くとメロディの一つ一つが音名に変換される。音楽が流れている中でアナウンスがあると、二重の言葉を聞いているかのように感じてしまい、非常に聞きにくい。

質問者 7 : 駅の改札口にもピン・ポーンという音サインがあるが、先ほどと同様か。

講 師 : 今まで気づいていなかった。最寄りの駅では聞いたことがない。もしすべての駅で設置されているのに気付いていないのだとしたら、おそらく改札口付近は他の情報が多様で、雑踏の中にあるので、その音だけが苦になるという状況ではないのだろう。

質問者 8 : 音サイン以外の駅の構造や情報はどうか。

講 師 : 東日本大震災後による節電で駅構内の照明が暗くなっていたが、過ごしやすさと感じている当事者は多かった。また、駅では広告看板の色使いが派手すぎると感じ、文字も書体によっては読めないこともある。

質問者 8 : テロップなどの流れ文字はどうか。

講 師 : 文字を一つ一つ読めるので、意外とみやすい。

質問者 9 : 「社会の問題」は社会に返すとは、非常に難しいと思うが、具体的にどのようなことなのか。

コ メ : 例えば、聴覚的な問題として、会議等で多数の声を分別できず聞き取れないということがあった場合、本人の努力不足とするのではなく、「一人ずつ話す」というルールにしたり、発表者の声を大きくしたりなど、「周囲の人々＝社会」が変化すれば解決する局面がある。また、それらを解決するようなインターフ

エイスの技術開発も考えられる。

「就労できない」「結婚できない」など、いろいろな困難をすべて個人のコミュニケーション障害のせいとする人がいたら、それらは現在の日本社会全体が抱える問題であることを、丁寧に伝えていく必要があるだろう。

2 配布資料

次のとおり。

発達障害における当事者研究の現状について

日時：2013年10月31日（木）18:00～20:00
場所：TKP市ヶ谷カンファレンスセンターカンファレンスルーム7D

東京大学先端科学技術研究センター 特任研究員
綾屋紗月

専門家による アスペルガー障害の診断基準

- ・ 相互的社会関係能力の限界
- ・ コミュニケーション能力の限界
- ・ 想像力の限界（こだわりが強い）



本人の内面で起きている現象
というよりも、
外から判断しうる、みかけの特徴
に拠っていることがわかる。

診断名はついたけれど・・・

なぜコミュニケーションのすれ違いを
一方の障害のせいにするのだろう。

例：☆アメリカ人と日本人
☆聴者とろう者

コミュニケーションのすれ違いは
あくまでも
両者の「間」に生じるもの。

「社会性の障害」
という定義では
社会のほうにある原因を
問うことができない。

3

3

コミュニケーション障害？

コミュニケーション障害

活動レベルや社会参加における障壁
(disabilities)

聞こえない
(聴覚障害)

うまく動けない
うまく話せない
(脳性まひ)

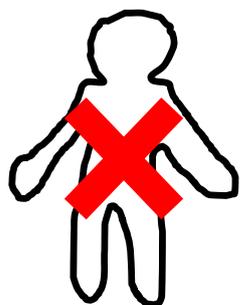
標準から外れた身体特性 (impairment)



社会性
コミュニケーションの障害
(自閉症スペクトラム)

インペアメントとディスアビリティの混同は
障害学的には大きな問題

4

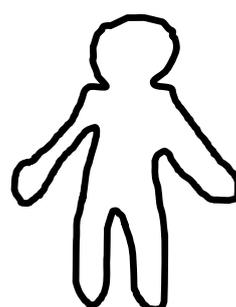
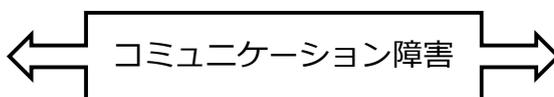
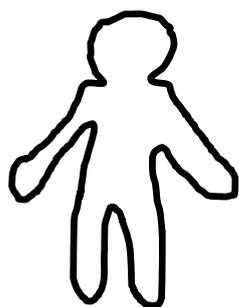


コミュニケーション障害の人



普通の人

↑こうではなくて

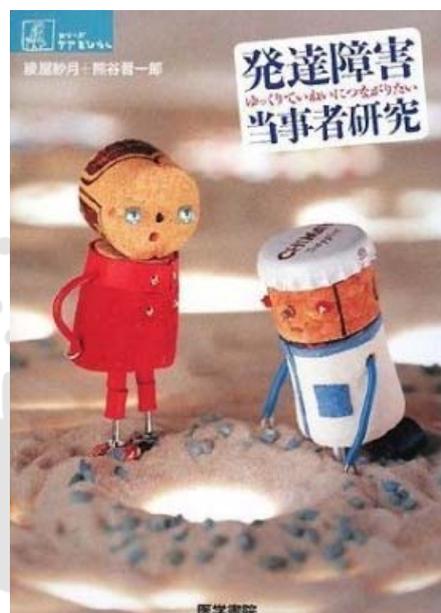


↑こちらのはず

5

発達障害当事者研究を進める上で

- ① 「社会性の障害」
「コミュニケーションの障害」
からは出発しない。
- ② 知りたいのは「ASDとは何か」
ではなく、
個々人の体験を言い当てる言葉。



6

全体よりも部分にフォーカスした情報を たくさん摂取する

【綾屋の特徴】

身体内外にある数多くの情報が
次々に私の意識に届けられる。

たくさんの感覚情報を処理できず
頭を埋め尽くしてひどく苦しくなる。



感覚飽和

7

フォーカス機能で見つける気持ち悪い模様



道端の枯れ葉



8

身体外部の刺激による感覚飽和 ～例：ファミレスで聞こえる音～

うわ!
ラシド～レ! 割れ
シソ～! たっ!!
ニ長調だな。
申し訳がきおません!

ガヤーン

ってかんで～ちょ～
信じられないって
ゆ～か～
いやもうほんとマジ
でうざくない?

新しいお客さんが
来た

び～んぽ～ん

女性の店員
の声っ喫煙ませ
席をきまでしょうか。
おタバコはお吸いになりますか。

女の子、
1歳くらいか
な～。おかあ
さん優しそう。

はい、みいちゃん、
あ～ん。あら、びー
しちゃだめでしょう。
あむあむね～。

ギャル語
だ...

部分に注目する特性： 「同じ」を「違う」と感じるすれ違い



【紫の雑草】

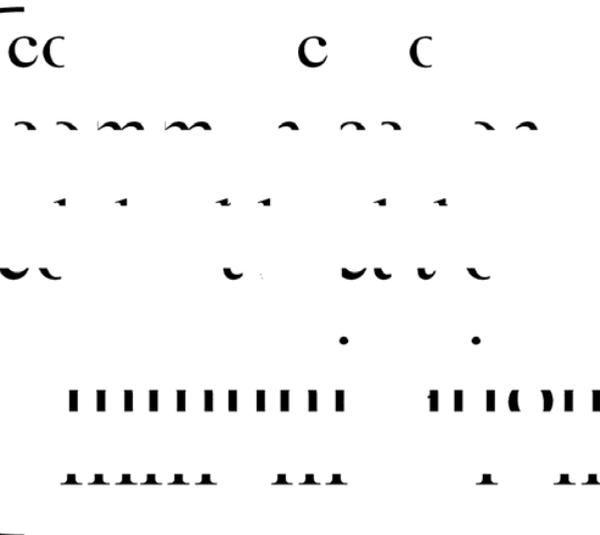


差異への気付きやすさ ≒似ているものの見つけやすさ

識字障害・・・欧文フォントが読めない

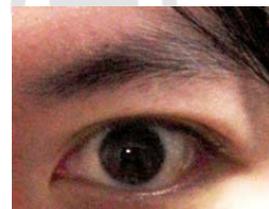
communication

「全体よりも部分にフォーカスした情報をたくさん摂取する」という特徴のため、一つのアルファベットを、縦線（|）や丸いカーブ（○）といった、各アルファベットに共通するいくつかの基礎的な模様に分解して見えてしまう。しかも、どの模様を抽出するかが高速で入れ替わるので、文字がちらつき一文字一文字を判別しづらい。
この現象が単語レベルだけでなく英文全体で生じるので、文字として読み続けようとしても、すぐに酔って気持ちが悪くなってしまう。



11

差異への気付きやすさ ≒似ているものの見つけやすさ

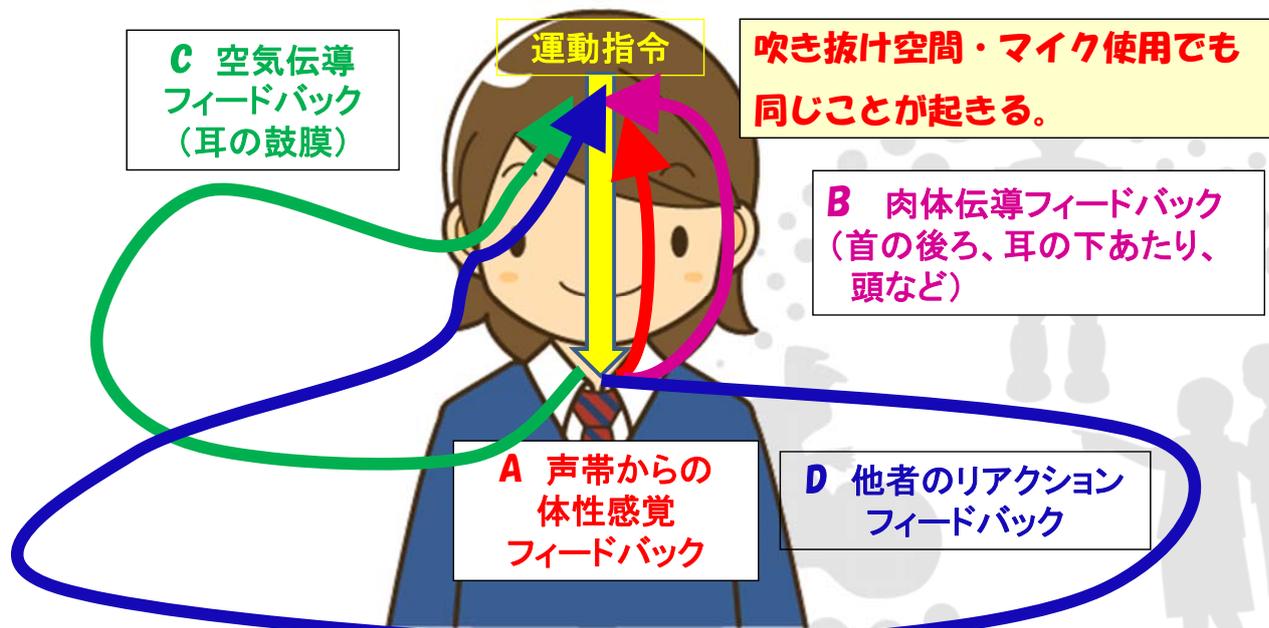


人の顔のパーツ同士を比べて
「AさんとBさんは似ている」と言う
ので
他者に共感されない。

12

どんどん声が大きくなる

自分の声のCがわんわんとうるさいので、負けずに大きな声で話すと、さらにCが増す⇒自分の声が聞こえない⇒さらに大声・・・とエスカレート。Dによってやめるが、関連性は無自覚なので何度も同じ指摘をされ、自信をなくす。



イラスト：わたなべふみ

なんとか他者像を追い払っても自己像はからっぽ



自分の内面を表現する言葉を持っていない。

これまで聞いたことのある言葉の中に自分のことを表す言葉が見つからない。

⇒自分の感じている感覚があるのかどうか、自信が持てない。
表現したくても、もやもやするだけ。

なんとか他者像を押し返すが、だからといってはっきりとした自己像があるわけではない。

「自己像」には実体がなく、煙のようにもやもやしていつかみどころも拠りどころもない感じ。
＝でもそれが戻るべき安定した、いつもの状態ではある

「自分らしく振る舞えばいい」と言われても、自分の動きやパターンが自分の中に見当たらない。

自己像が明確でないのですぐに他者像に侵入されてしまう。

ぐるぐる思考

なんで私はこんなふうに
ダメなんだろう

あの相手の表情は
どういう意味だろう

相手の表情に対して
自分はどのように
ふるまえばいいだろう

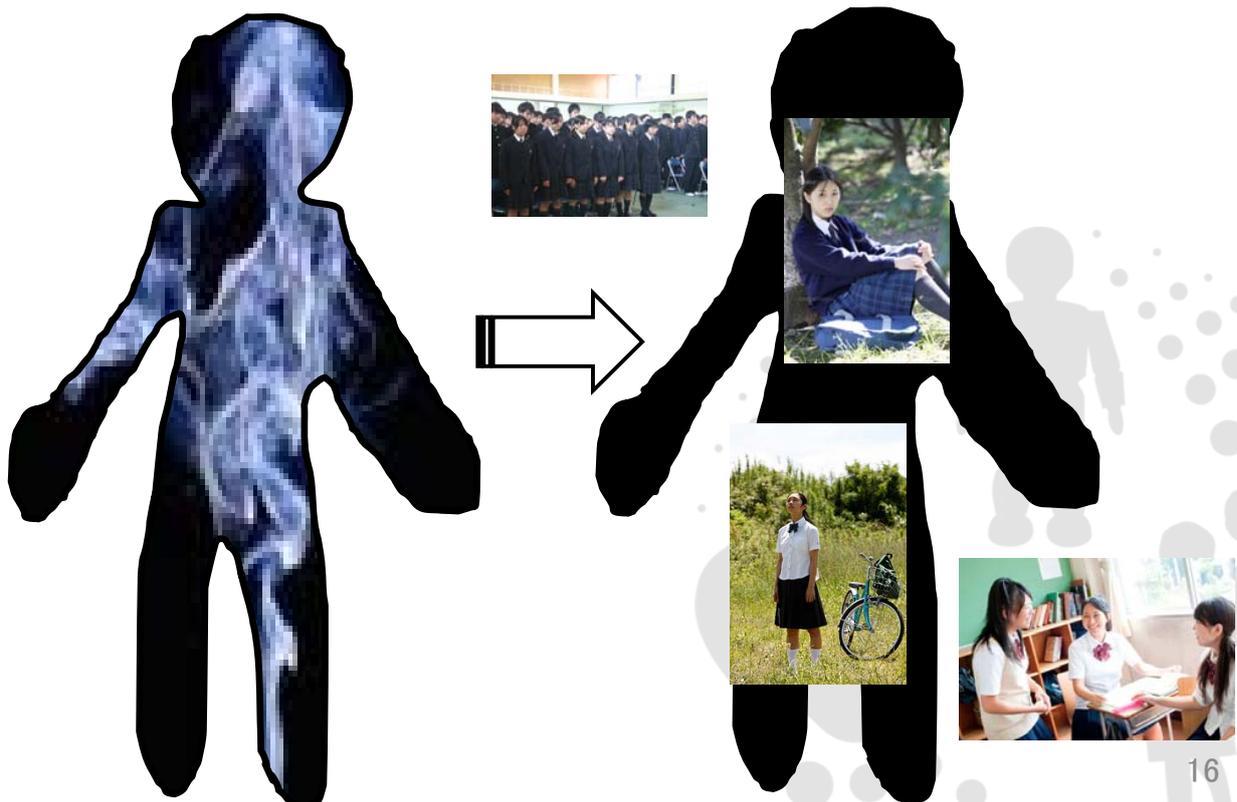
私の行動はあれで
よかったのだろうか



15

イラスト:わたなべふみ

当事者研究後 自己像と他者像の区別がつく

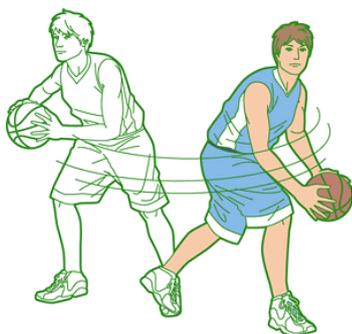


16

当事者研究がもたらした「自分の軸」

以前は他者に近づきすぎるか
まったく疎遠にするかの両極しかなかった。

しかし
当事者研究によって自分の軸が生まれる
ことにより、
バスケのピボットターンのように
気持ちの片足が一步、他者に近づいたり
遠ざかったりしても、
もう片方の足は軸として残っているので、
元の位置に戻ってくる事が
できるようになった。



こうして徐々に他者と適度な距離を保てる
ようになっているように感じる。

17

Alternative Space Necco (ネッコ)



「発達障害当事者による、
発達障害当事者のための」
就労支援施設。

就労継続支援B型事業所

「ゆあフレンズ」における
発達障害当事者の雇用促進、
精神保健福祉士による相談事業、
発達障害の当事者による
ピアサポートなどを行っている。
また発達障害者の居場所となるべく、
カフェ営業やフリースペース開放も
行っており、ライブ、トークショー、
講演会などのイベントも開催している。

18

発達障害コミュニティにおける問題点

発達障害者コミュニティにおける問題点

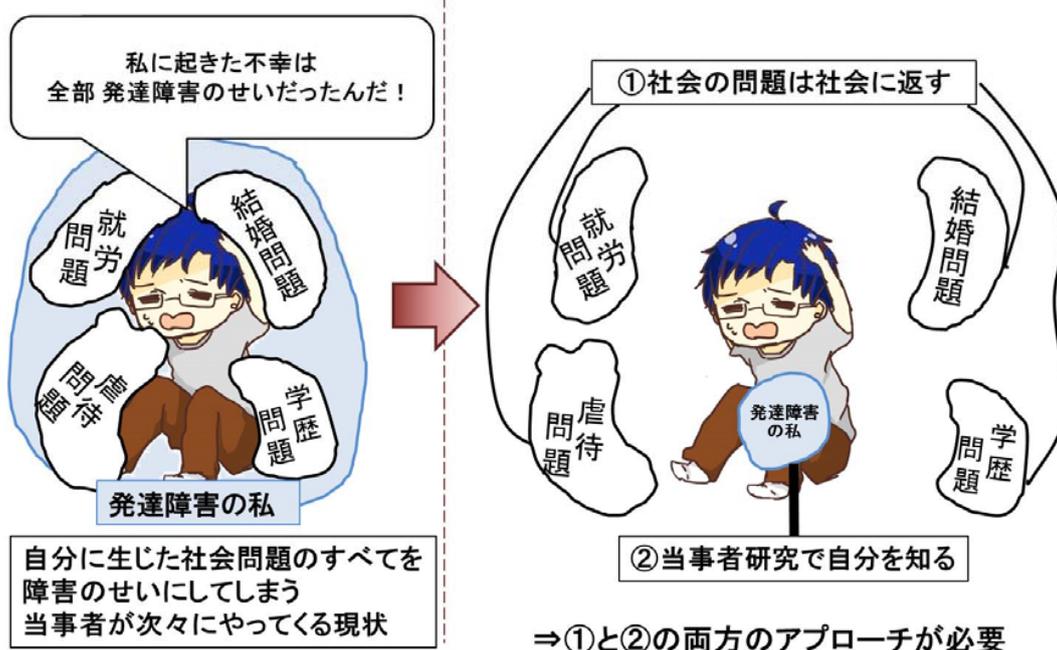


社会とのすれちがいを、
個人の側の特性によって記述する
発達障害概念
(社会性・コミュニケーションの障害)
によって、
教育、就労、司法、家庭など
さまざまな領域で社会的な排除を
されている人々が
十把一からげに
発達障害と名づけられている。

⇒当事者・支援者共に
ニーズを把握しづらい。

自分の問題と社会の問題とを切り分ける

自分の問題と社会の問題とを切り分ける



Necco当事者研究会（広める会） 初期設定のルール

Necco当事者研究会 ルール確認

図1

<p>OK ○</p>	<p>・飲み物 ・音やにおいが少ない食べ物 (キャンディ・おにぎり等)</p> 	<p>・部屋を出入りすること 遅刻・早退・ドタキャン・ エスケイプOK 無理をしない!</p> 	<p>・横になる・寝る ・ゆかに座る 無理をしない!</p> 	<p>・携帯でメールや ネットを見る</p> 
<p>NG ×</p>	<p>・においが強い食べ物 ・音がうるさい食べ物 ・アルコール</p> 	<p>・長く動き回り続ける ・騒ぐ</p> 	<p>・誰かの発言中に 話す</p> 	<p>・携帯で話す ・着信音をならす</p> 

21

「自分の実感を語る」ためのアナウンス

毎回の研究会の告知文（2011/8～）

自分の経験を言葉で語り、
仲間の言葉を互いに聞くことで経験を共有し、
新たな表現方法を発見していきましょう。

自分の実感（感覚や体験）を語るとは？

過去の研究会の実践から

【あてはまると思われること】

- ・個人の中で反復していると思われること
- ・個人が経験した一回性のエピソード

【あてはまらないと思われること】（2013/6/3追加）

- ・専門家の知識（**専門用語**）
- ・複数の個人間（カテゴリー）で反復していると思われること
- ・他の参加者に対する**分析・評価・解決策・アドバイス**

22

Necco当事者研究会で大事にしていること

• 具体性

情報をインプットする段階で記憶がまだらになりがちだったり、曖昧だったり、細かすぎたりするので、なるべく1次データを徹底的に出し合う。1次データを共有していただくだけでも、すれ違いの原因がかなりわかることが多い。

(飛躍した解釈によるすれ違い多数)

• 構造問題

犯人を見つけて謝罪する責任問題ではなく、両者のあいだに起きたすれ違いの構造を見つけるのが目的。

• 共有性

- 「自分のことよりも他者のことのほうがよくわかる」ということもある。
- 話し合いの内容ですら、後から「言った／言わない」の争いのもとになりがちなので、複数名で1次データを共有することが命綱。

第 8 回勉強会

1 概 要

- 1.1 日 時：平成 25 年 11 月 28 日（木）18：00～20：00
- 1.2 場 所：TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター カンファレンスルーム 7D
- 1.3 テーマ：すべては「楽しい」のために ～結果としてのユニバーサルデザイン～
- 1.4 講 師：望月庸光氏（元（株）オリエンタルランド 理事）
- 1.5 参加者：41 名
- 1.6 講演概要：

これまでの取り組みや経験に基づいたユニバーサルデザインの考え方についてお話いただきました。1983 年の開園当初は、すべてがアメリカのコピーであったため、日本の思想や障害のあるゲストへの対応も十分ではなかった。例えば、「日本の四季」を演出するための樹木選定においてもアメリカの承諾を得るのが大変であった。

そのような中、視覚障害の方から「もっとこうしたら、楽しめるのではないか」ということを伝え聞き、実際に来園、体験していただき意見を聞いたことでたくさんのお見・気づきがあった。そのことを機に「不便なことを調べる」ではなく、「楽しいものを調べる」という切り口で改善に取り組むようになった。その結果、我々自身も「楽しむ」ことが重要であり、素人集団ながら少しずつ改善策を見出すことができた。なお、楽しむための前提条件として、「安全・安心」「清潔」「利便性」「情報」「すべてがショー」「気兼ねなく」ということが重要である。

また、楽しむための配慮点として「配慮が気付かない」「特別を普通に、普通を特別に」「ハードとソフトの良い関係」「夢と現実のバランス」が特徴といえる。さらに、ゲストも時代とともに変化する。例えば、親子で来園した子どもは、成長とともに友人、恋人、夫婦で来園するなど人生のステージが変化する。その時々でも楽しめることができるように考えることが重要である。

最後に、すべてのゲストはVIP であり常に変化しつづけるため「当パークのキャストは世界一です、でもボトムです」というコメントでまとめていただいた。

1.7 質疑応答

質問者 1：パーク内のバリアの発見はどのように行っているのか。

講師：毎年、障害当事者にご来園いただき、確認作業を行っている。

質問者 1：どのような障害当事者が確認作業を行っているか。

講師：決まってはいるが、初めての方とリピーターの両方をお願いしている。

質問者 2：年々、来園者が増加しているが、これからも安泰なのか。

講師：これからは人口減少社会のなかで海外からのゲストをいかに呼び込むかが課題となる。また、リピーターも多いため、アトラクションやプログラムのアレンジを加えていかなければならない。さらに、高齢社会を迎えて高齢者が楽しめるパークづくりが必要になっている。

質問者 3：パーク内で取り組んでいる内容を交通機関等に応用できないか。

講師：具体的に何が応用できるかわからないが、我々の取組みのほとんどは素人が行っていることである。要は、専門家やお金をかけることがすべてではない。

質問者 4：これからも問題は生まれるのか。

講師：問題があるのは当たり前。問題に取り組んでいくことが、次につながっていくのではないか。

質問者 5：酸素携帯者などの対応ルールなどは具体的に準備されているのか。

講師：対応マニュアルはあるが、酸素携帯者など詳細な対応ルールは決まっていない。その場のキャストの判断で対応している。ただし、ご本人にも自己責任を負っていただいている。

質問者 6：複数の車椅子利用者への対応はどのように行っているのか。

講師：パーク内には、常に車椅子利用者のゲストはご来園されていて、アトラクションなどで重複することもあるが、できる限りゲストの条件に沿う対応を行うようにしている。

質問者 7：ゲストへの素敵な対応をするキャストはどのように教育しているのか。

講師：ゲスト同様にキャストも変化している。組織的な教育を行ったうえで、個人で判断ができるようにしている。キャストが迷わず対応出来るのは「言っている

コトとやっているコト差の無いパーク運営」がポイントだと思っている。

質問者 8：ソフト面のバリアフリー化のポイントはあるか。

講師：非常時の対応ができることが重要だと考えている。常に最悪の場合を想定し、対応することとしている。

質問者 9：キャストの手話への取組みを教えてください。

講師：手話もパフォーマンスの一つとなるため、キャストのモチベーションとなっている。また、同僚のキャストがゲストと手話で会話するところを目の当たりすることがあるため、常に手話を学ぼうとするキャストがいる。

質問者 10：知りたいことはなんでも教えてくれるので、とても安心感がある。どのような情報教育があるのか。

講師：すべてのアトラクションには、ストーリーなど詳細な設定が存在し冊子としてまとめられている。それらを熟知することで、ゲストへのきめ細かい情報提供ができるものと考えている。

2 配布資料

次のとおり。

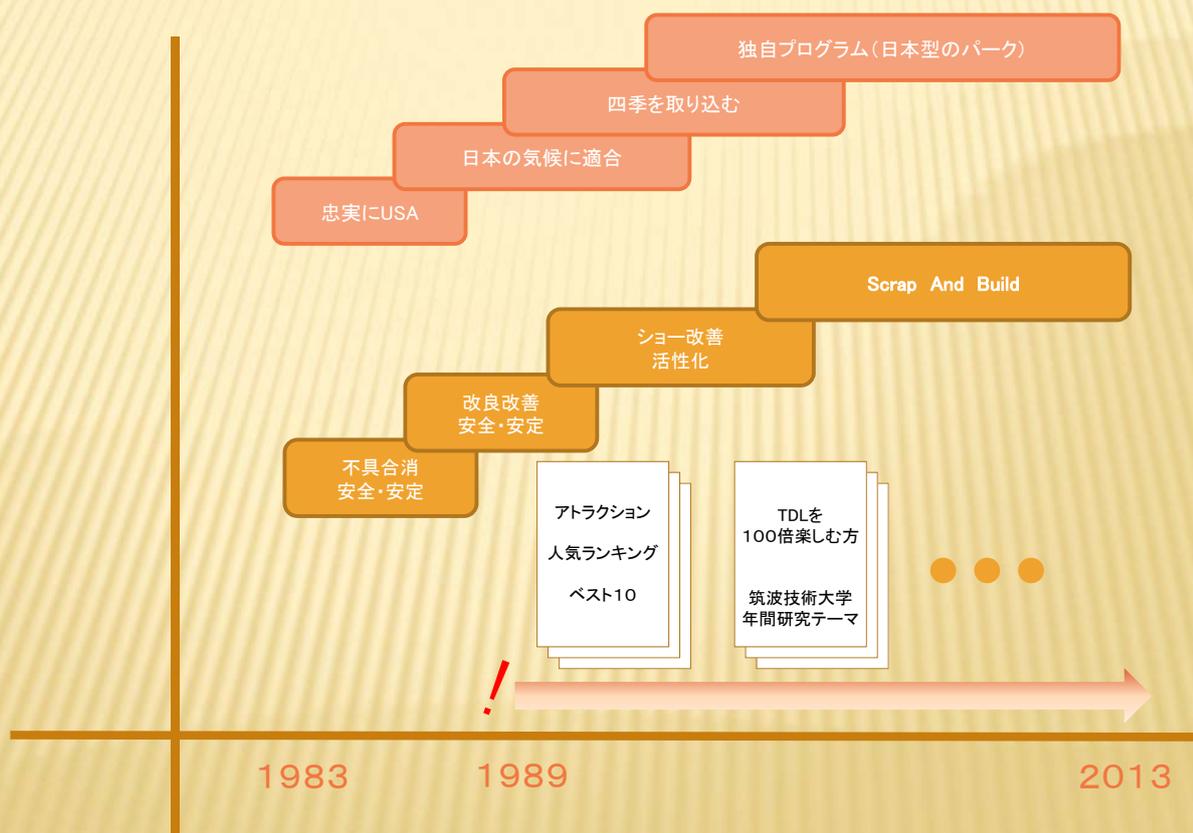
すべては**楽しい**のために (結果としてのUD)

望月庸光

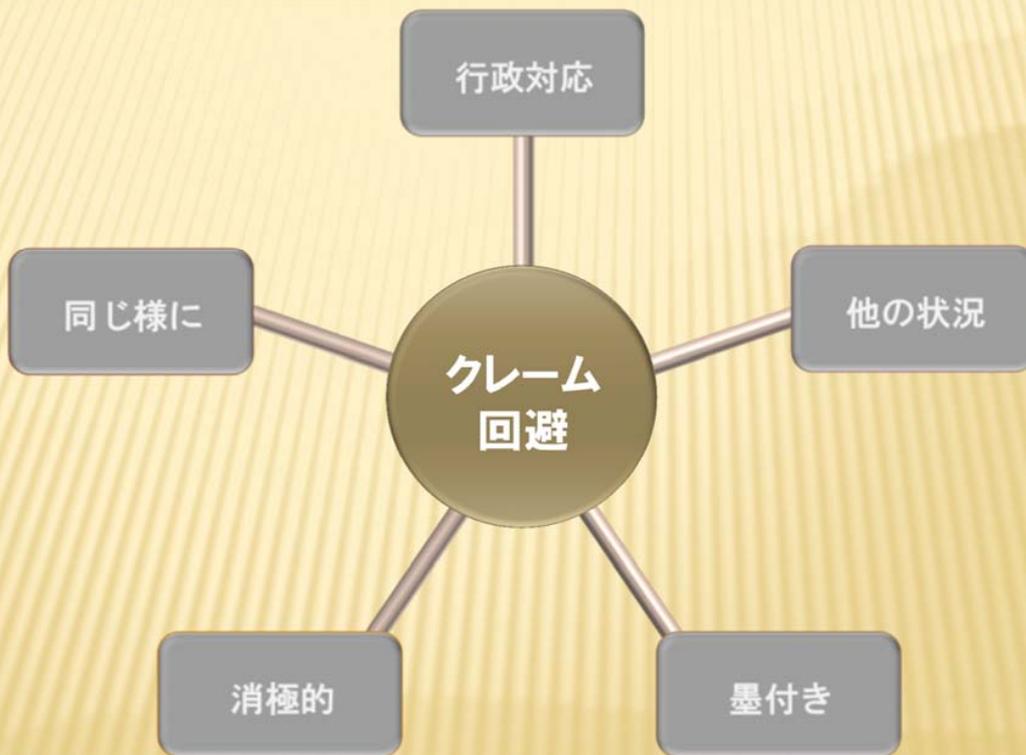
公益財団法人
交通エコロジー・モビリティ財団
バリアフリー推進勉強会

2013.11.28

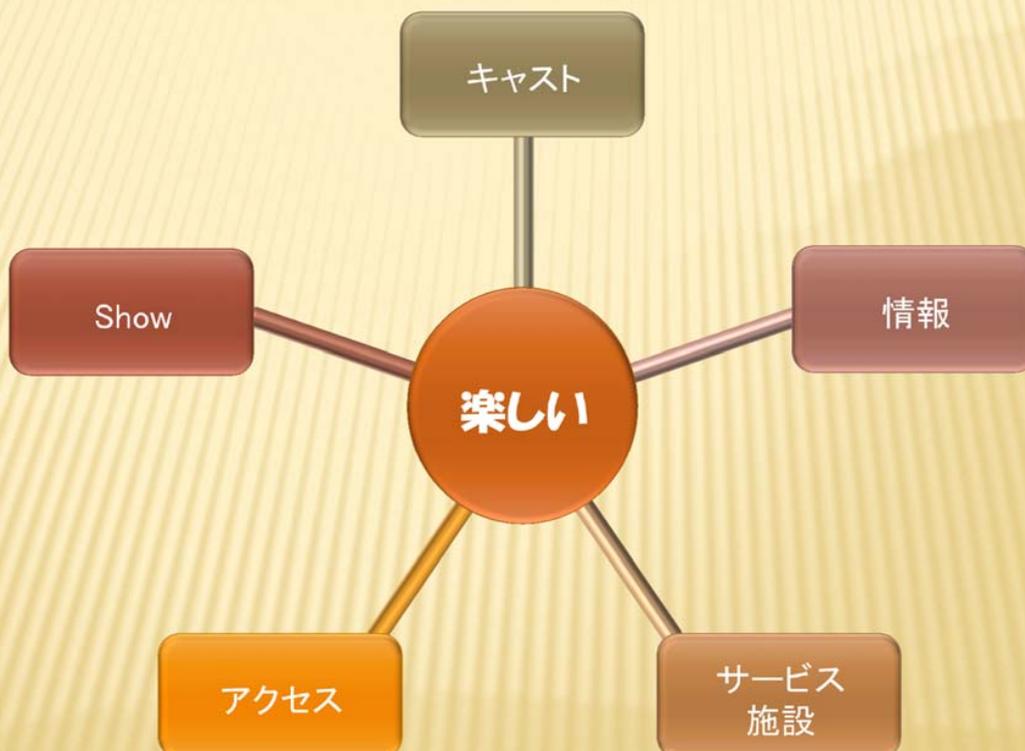
●パークの歩み



クレーム対策



楽しい



情報

情報も楽しく

- 情報提供もショーの一部
- 楽しみながら情報を得る
- 気兼ねなく・安心して・安全に
- ゲストのイマジネーションを刺激する
- 既存の施設設備を活かし・効率化を図る

サービス施設

楽しむための前提

- 安全・安心
- 清潔
- 利便性
- すべてがショー
- 気兼ねなく

アクセス

ショーそのもの

- 意識しない・気兼ねなく
- ショーの一部
- 安全・効率

キャスト

感じる・気づく

- すべてのゲストはVIP
- 「フィロソフィー」と「マニュアル」
- 「言っているコト」と「やっているコト」の差を無くす
- 普通を特別に、特別を普通に

Show

すべてがショー

- ゲストの感性・イマジネーションをONにする

配慮

が

気付かない

が良い形

特別 を 普通 に

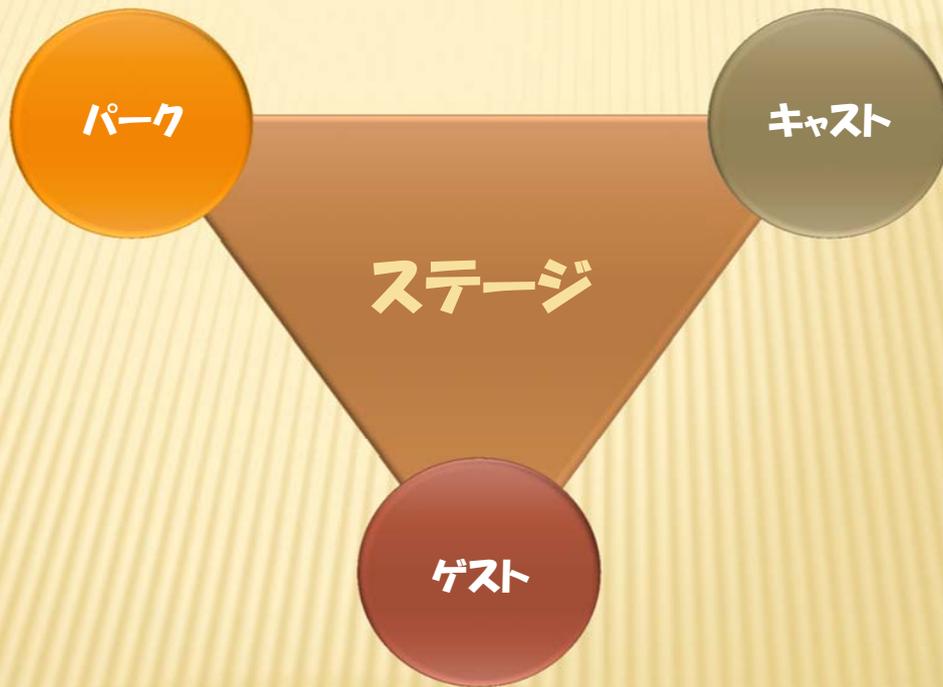
普通 を 特別 に

ハード と ソフト

夢 と 現実

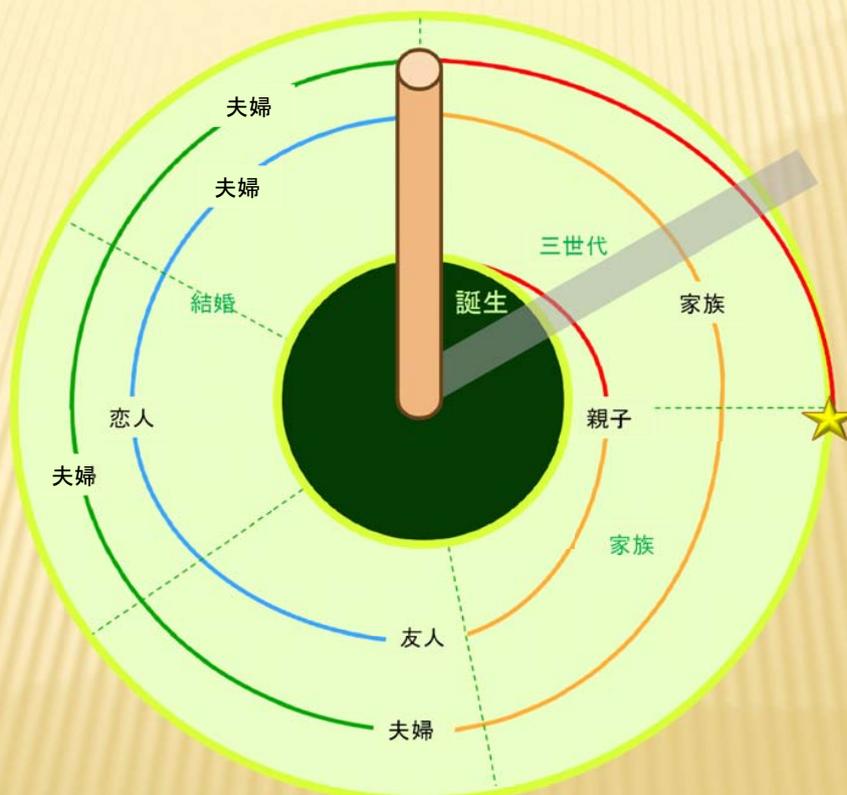
の良い関係

●気づき

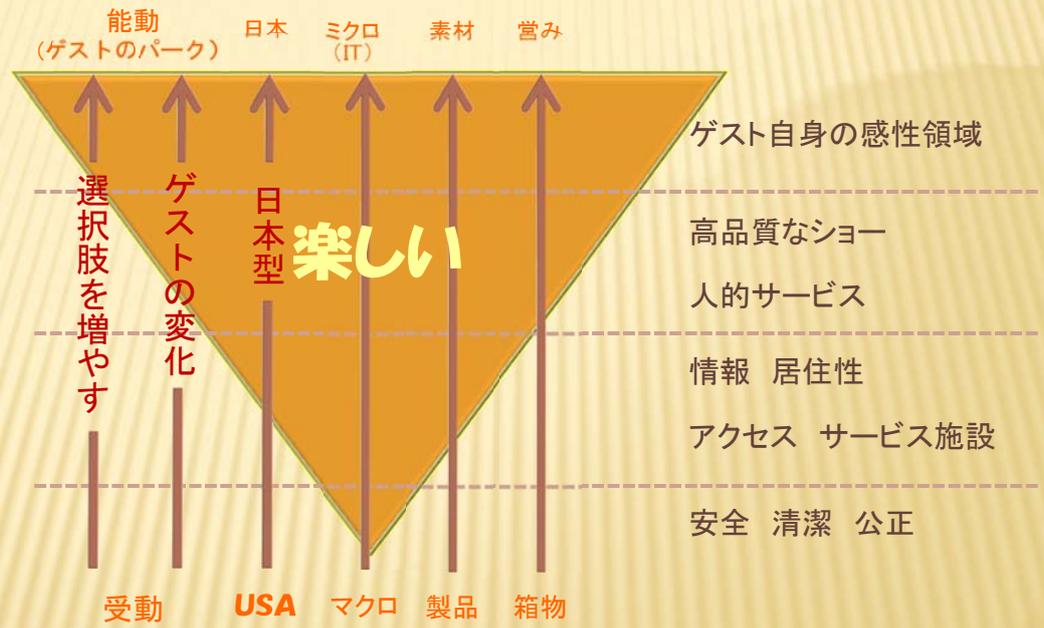


変化

ゲストの変化とパークの受け皿



変化と目指す



東京ディズニーリゾートのキャストは世界一です、でもボトムです。

第 9 回勉強会

1 概 要

- 1.1 日 時：平成 25 年 12 月 13 日（金）18：00～20：00
- 1.2 場 所：TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター カンファレンスルーム 7D
- 1.3 テーマ：日本のバリアフリーは世界の非常識？
～日本と海外のバリアフリーを比較して～
- 1.4 講 師：木島英登氏（木島英登バリアフリー研究所 代表）
- 1.5 参加者：43 名
- 1.6 講演概要：

これまでの海外旅行の経験を基に各国での交通バリアフリー、合理的配慮の考え方、車椅子使用者のスポーツ観戦について話題提供いただきました。

海外における交通機関のバリアフリー化について、①鉄道、メトロ等における問題として、車両とホームの段差解消対策、駅員の接遇・介助、切符の予約方法、無人駅の対応、車両内の車椅子スペース等が提示された。②バス、BRT における問題として、車両の大きさ、車椅子の固定等が提示された。③航空機、旅客船における問題として、搭乗（乗船）口へのアクセスが階段のみの乗降設備であるため乗降できない等が提示された。それぞれの解決の糸口として、①については、車両にスロープを設置すること、障害当事者がスロープを準備し、周りの人がサポートする環境の構築すること、車両に合わせて部分的に床上げをしてスロープ状にする工事などの解決方法も海外では見られること。②については、車両自体を大きくすること、車いす利用者側での安全確保。海外では気軽に乗り降りしている事例があげられた。③については、搭乗階段をジグザグ状のスロープに変更している海外の空港事例が示された。

また、運賃の問題として、障害者割引を実施することで交通事業者の免罪符となってしまうのではないかということが提示された。さらに、道路環境の問題として、海外では歩行者優先で設計されていることが多いが、日本では車優先で設計されるため、歩道側でバリアフリー化しなくてはならないということが提示された。

合理的配慮については、要望を 3 つの区分（絶対に必要なこと、できれば必要なこと、あればうれしいこと）で考えることが必要であると指摘された。特に重要なことは、「使いやすい」と「使えない」は、全く違うことであり、まずは「使えない」から失くしていくことが先決である。例えば、飛行機に搭乗できないこと、駅のエレベーターが利用できないことなどに取り組むことが必要である。

さらに、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを迎えるにあたり、スポーツ観戦における取組みとして、海外の事例（野球のMLB、バスケットのNBA、サッカーのプレミアリーグ、ラグビーのW杯等）、日本の事例（野球の甲子園・東京ドーム・札幌ドーム、サッカーの浦和レッズ・ガンバ大阪・2002年日韓W杯）、チケット販売の事例などを紹介していただき、車椅子スペースや多機能トイレ等の設備や動線の問題、チケットの予約方法や割引などの問題があることが提示された。

また、五輪のボランティア活動に障害者も参加してほしい。出来ることはたくさんあるとまとめられました。

1.7 質疑応答

質問者1：日本では、海外のように障害者に一般の方が手を差し伸べることが少ない。東京オリンピック・パラリンピックを迎えるにあたり、そのようなことを浸透させるために考えられることはあるか。

講師：経験が必要。日本では健常者と障害者とを区別され過ぎている。お互いの立場を体験できるロールプレイングなどを積極的に行うべき。さらに、障害当事者もボランティアなどの社会参加することで差し伸べられる側ではなく、差し伸べる側になることも重要であり、手を差し伸べることが、大それたことではないような環境整備ができればよいのではないか。

質問者2：エレベーター等の不正利用（車椅子使用者よりも健常者が常に利用している状況等）を防ぐために不慣れた場所に設置することも効果的ではないかというご意見だが、健常者側から強硬な意見がでてくるのではないか。

講師：バランスの問題だと考える。「便利なところで利用できない」と「不便だから利用できる」のどちらかで考えると、まずは障害者が「利用できる」ことが重要である。具体例として、高速道路の車いす用駐車スペースは、トイレに近い場所にあるが、売店などには遠い場所に設置されていることが多い。

質問者3：車いす用駐車スペースには、罰則規定はないのか。

講師：日本にはない。また、利用対象者も明確となっていない。対策として、免許更新での情報提供や免許取得時などでの指導があればよいと思う。設備はあるが、ルールがないのが問題だと思う。

質問者4：2020年に東京オリンピック・パラリンピックの開催に際し、民間企業、行政等

の各セクターはどのような取組みが必要だとお考えか。

講師：日本にとってチャンスだと思う。世界基準のバリアフリーやユニバーサルデザインに変換すべき時期ではないだろうか。具体的には、対策が遅れているソフト面。また、宿泊施設の対策は必須になる。キーワードは、「専用〇〇」ではなく、「兼用〇〇」であること。例えば、アメリカでは、「車椅子用トイレ」はない、すべてのトイレが車椅子利用者も利用可能なスペースがあるため。

質問者 5：宿泊施設として、障害当事者のお客さまを迎えるにあたり、どのようなことに配慮すべきなのか。

講師：車椅子ユーザーとしては、すべての出入口幅を広くしてほしい。ホテルなどのバスルームの入口も段差をなくし、出入口幅を広くしていただくと利用することができる障害者もいる。単に「バリアフリールーム完備」と謳っていると、障害者も完璧を求めてしまい、クレームのもととなることがある。障害当事者とする、詳細な情報提供を行っていただくことで障害者側が判断する材料を提供してほしい。

質問者 6：例えば、バスのバリアフリー化を考える際、バス側だけで対策を考えがちであるが、障害者側で考えられる対策もあるのか。

講師：現在のバリアフリー化は、一方向だけで考えがちであるが、本来は双方向で考えるべきだと思う。例えば、バスでいえば、車両だけではなく、車椅子利用者や車椅子メーカー側で対応できることを考えていくべきだと思う。

質問者 7：車椅子利用者は雨の日に出されるのでしょうか。また、自動販売機の使い勝手はいいのでしょうか。

講師：車椅子ユーザーとして、雨や雪の日、砂利道や砂道などは苦手。雨の日には、帽子やウインドブレイカーなどで外出します。自動販売機よりは銀行 ATM や券売機の方が不便を感じる。自動販売機はコンビニで代用できるが、銀行 ATM や券売機の液晶画面は立っている人の目線で（人間工学的に）見やすいように設計されていて、車椅子ユーザーの目線では液晶画面が見にくいこともある。

2 配布資料

次のとおり。なお、当日の講演スライドは下記 URL にて確認できます。

3 参考資料

木島英登バリアフリー研究所

URL : <http://www.kijikiji.com/consultant/>

日本のバリアフリーは世界の非常識？

木島英登 work@kijikiji.com

■ 世界の交通バリアフリー

- ・鉄道、メトロ、LRT 駅員の介助は必要なのか？ 問題点解決のアプローチ。車両とホームの段差。話題のホームドア。進まないコンパクトシティとLRT。
- ・バス、BRT そもそも小さい。バス停がダメ。イスラエルでは乗客がスロープ。固定について。
- ・飛行機 船 LCC問題。手間かけすぎ。接客業は女性ばかり。ローテク一番。
- ・レンタカー、バイク 世界の事例。個人モビリティのアイデア。眼鏡と車いす。
- ・障害者割引は必要か？ 免罪符。多様な料金体系。特別配慮。面倒な手続き。不正防止。障害者って誰？
- ・道路環境 自転車とバリアフリーの関係（ドイツ鉄道、中国の街、オランダなど）信号。ロータリー。歩行者優先、自動車の締め出し。歩道と車道の境界。

■ 合理的配慮について

- ・要望を3つに分ける 飛行機の搭乗。駅のエレベーター。点字ブロック。優先順位の大切さ。
- ・義務と善意 線引きの重要性。勘違いする当事者。マニュアル主義からの脱却。柔軟性。
- ・不正利用の防止 車いすマーク駐車場問題 → ルール決め。当事者教育。一番便利にしない電車のエレベーター → メイン導線にしない
- ・介助を断る権利 専用施設の弊害。選択肢があること。当事者意見の尊重。子供じゃないんだから。

■ スポーツ観戦

- ・世界の事例 メジャーリーグ。NBA。プレミアリーグ。ラグビーW杯。コンフェデ杯。
- ・日本の事例 甲子園。東京ドーム。札幌ドーム。浦和レッズ。ガンバ大阪。日韓W杯。
- ・チケット販売 誰が座る？ 点ではなく線のバリアフリー。配慮と優遇の線引き。

■ まとめ

- ・日本の問題点 一方通行のバリアフリー。妥協点の見つけ方。対立から対話へ。
- ・情報発信の重要性 「記載がない＝無い」でないことも多い。事実の公表。国際化対応。
- ・バリアフル情報 無いことは恥ではない。誹謗中傷デマのリスク管理。利用者に判断してもらう。
- ・当事者の意識改革 社会性の欠如。無知からくる不幸。様々なやり方。お互いの歩み寄り。
- ・普通好きの弊害 普通とそれ以外。多数派と排斥。健常者・障害者と分ける日本。

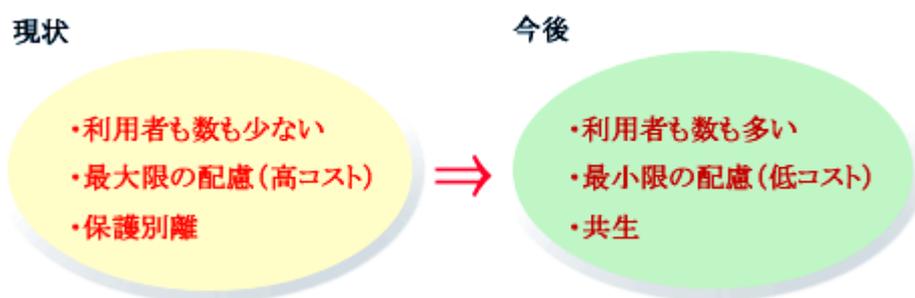
バリアフリー 日本と世界の違い

■過剰すぎる設備とサービス

どうして、日本のバリアフリーは過剰に豪華なのでしょう？ 特別視されすぎること、設置コストがかかりすぎることは、バリアフリーが進まない大きな原因です。福祉という名のもとに、バリアフリーの設備やサービスは、高コスト体質になっています。予算が削減される中、これからは費用に対する効果の視点も無視するわけにはいきません。

また、利用者が完璧を求めすぎているのではないのでしょうか？ 理想のバリアフリーは人それぞれ違います。100 人いれば、100 のバリアフリーがあります。すべての人が満足できる設備やサービスを追い求める(最小公倍数)のではなく、費用に対する効果の視点も考慮した現実的な妥協点(最大公約数)が必要です。**合理的な配慮** reasonable accommodation を考えましょう。

100 点満点でなくても、60 点でもいいから、広く浅くどこでも対応できるといいと思うのですが、「障害のある方はこちらで対応します」という、狭く深い対応で、特別視すぎる気がします。足し算のバリアフリー「何があれば便利か」ではなく、引き算の考え方「何があれば十分か」。そのような考え方も必要です。



■多様なやり方

車いすで世界中(100カ国以上)を旅して、様々なバリアフリーを見てきました。バリアフリーの考え方も、対象者も、設備も、時と場所が変われば大きく違います。進んだ地域では、障害者を特別視せず、簡単に、自然に、共生できるように配慮をしています。逆に、バリアフリーの設備が何もないところもあります。その場合は人力での対応があります。

日本は、保護・隔離の意識が強い、障害者専用のバリアフリーとなっているのが特徴です。法律や条令を遵守しただけの有効に活用されていない施設やサービスが多く、設備のバリアフリーは非常に進んでいますが、心のバリアフリーは進んでいません。

障害者専用の施設やサービスにした場合、通常の施設やサービスを利用できなくなってしまうという新たな弊害を産むことがあります。設備や配慮が無いよりは、有るほうがいいのですが、必ず利用しなければならないことはないはず。バリアフリー設備やサービスは、利用者の選択が一つ増えたと考えるべきです。



■利用者がもっと歩みよらなければならない

過剰すぎる設備もそうですが、日本のバリアフリーは完璧を目指しすぎています。すべての人が満足する設備はありません。どこかで割り切りが必要です。もっとも、何らかの不自由を感じる人には、自分の努力では解決できない問題もあるのは事実。しかし、障害者＝できない人ではありません。できることもたくさんあります。できないことはあるかもしれないが知恵や工夫で乗り越えることもできます。

過剰な意識や自立を妨げるような特別待遇は必要ありません。障害者自身もできない理由が、障害が原因なのか、自分自身の問題なのか曖昧になっています。依存することになりきってしまい、甘えすぎてもいけません。もちろん障害があろうとなかろうと、困っているときに手助けが必要なのは同じです。障害があるから手助けが必要なのではなく、困っている事項に対して手助けが必要なのです。

世界のバリアフリーは非常にシンプル。それは障害者専用でなく一般の人も利用します。専用にしてしまうと、一般社会から乖離してしまい、逆に線を引くことになります。特別扱いではない。どちらも歩みあってこそ、よりよいバリアフリーになります。障害者側も権利だけを主張するのではなく、同時に発生する義務もきっちり行う必要があります。

大切なこと

- ・ 要望を3つに分ける
 - ・ 絶対に必要なこと
 - ・ できれば必要なこと
 - ・ あれば嬉しいこと
- ・ 完璧は求めない
 - ・ 切り捨てる部分も必要

「使いやすい」と、
「使えない」は、全く違う。

※「使えない」ことを、なくするのが先決

共通する要望

- ・ 安いこと
- ・ 簡単であること
- ・ 安全、安心、便利

どこにラインを引くのか？
量と質の問題

- A：数は少ないが、
「使いやすい」施設は多い。
B：使いにくいが、
「使える」施設が多い。

どっちがいいかしら？



■使わなければならない設備

バリアフリーの設備や配慮を、必ず利用しなければならないという風潮があまりに強いです。例えば、映画館。車いす専用席が作られていますが、車いすの人が必ずそこに座らなければいけないことはないはず。同行者と一緒に並んで座って鑑賞したい人もいるでしょう。駅の階段に設置されている昇降機。利用するのに時間と手間がかかるため、周りの人に担いでもらって上がるという手段を使う車いすの人がいてもいいはず。

専用設備は、確かに便利ですが、「選択肢が増えた」と考えて欲しいものです。設備があるからといって、それが時と場合、人によっては便利だと感じないこともあるからです。専用＝分離につながり、逆に心のバリアを感じて、不快になってしまうときがあります。

第 10 回勉強会

1 概 要

- 1.1 日 時：平成 26 年 2 月 14 日（金）18：00～20：40
- 1.2 場 所：日本大学理工学部駿河台校舎 1 号館 3 階 131 号室
- 1.3 テーマ：東日本大震災と被災地の障害者
 <第 1 部> 「逃げ遅れる人々 ～東日本大震災と障害者～」上映会
 <第 2 部> 被災された障害当事者による講演
- 1.4 講 師：設楽俊司氏（JDF 被災地障がい者支援センターふくしま スタッフ）
 ：小山賢一氏（みやぎ盲ろう児・者友の会 会員）
- 1.5 参加者：19 名
- 1.6 講演概要：

東日本大震災がもたらした居住地の被害状況、障害当事者の避難生活、またそこから見てきた課題および教訓、今後の公共交通やまちづくり等への提言や思い等についてお話いただきました。

設楽氏（電動車椅子使用者）からは、「避難所での障害者の状況」として、一般避難所では障害者の避難生活を想定していなく、様々な理由により避難生活ができなかった。そのことを踏まえると「避難所のあり方」として、避難所は公共施設であることからユニバーサルデザイン化する必要があると指摘がありました。また、避難所となる学校では、インクルーシブ教育の推進を図り、日頃からバリアフリー化した施設整備を行うことが必要ではないか。一方、福祉避難所としてホテルや障害者個人宅等を積極的に活用すべきではないか。ただし、すべての障害者ではなく医療的なケアが必要な場合のみを対象とすべきだと提言されました。

さらに、福島特有の原発（放射能）の問題として、労働者人口の県外流失等による福祉従事者の確保が大きな課題となっている。また、将来的に福島県出身等で差別や人権問題が発生することも考えられ、その擁護活動が必要になるのではと提言されました。

最後に、震災前の状況に戻すという復興ではなく、誰もが使いやすいまちに創り変えていく必要があるのではないかとまとめられました。

小山氏（弱視・難聴の盲ろう者）からは、地震発生時、避難時、津波の到達時、避難所の生活についての状況や心情のお話があり、その後障害当事者にとって避難所の生活で困難なこと、救われたことについてお話いただきました。

特に、避難生活における盲ろう者は、視覚障害の困難を 1、聴覚障害の困難を 1 とし

た場合、重複だから合わせて2となりそうだが、実際には2どころか100になってしまうような困難もある。

一方、移動環境として、地方都市での課題となっている公共交通機関があまり機能していないことが挙げられた。障害者の自立生活を行うためにも、利用できる公共交通機関の再構築が必要である。

最後に、参加者に対し身近にいる障害者を気にかけてほしいと話され、また日頃から関わる機会を持ってほしいとまとめられました。

1.7 質疑応答

質問者1：各自治体の避難計画には不適切などころがあるということだが、具体的にはどのようなことなのか。

講師（設楽）：避難計画の中には、公共が主導しないことを前提とするものもあると聞いた。

質問者2：復興についての実感はどのくらいあるのか。

講師（小山）：道路などは以前のように復旧しているが、バスは平日のみの運行、また本数が少なく利用しにくい状況である地域がある。

講師（設楽）：復興は進んでいるが、地域間格差が大きく福島県内でも格差がある。特に沿岸部は非常に遅れている。また、代替交通であるBRTにおいては、低床バスであるにもかかわらず、車椅子使用者は2日前に連絡をしなければ利用できない状況である。

質問者3：地域交通については、地域住民で支えていくことが重要だと思うがいかがか。

講師（小山）：現状のバスは、利用したいときに時間が合わず利用できない。今後は、地域唯一の公共交通機関であるバスの運行継続、障害者も含めた利用者が利用しやすい交通環境をめざし、地域住民と連携しながら活動していきたいと思う。

講師（設楽）：地方において障害者には何らかの移動支援は必要である。特に、仮設住宅に暮らす障害者の移動は未だに苦労している。

2 配布資料

次のとおり。

3 参考資料

東北関東大震災障害者救援本部

URL : <http://shinsai-syougaisya.blogspot.jp/>

ドキュメンタリー映画「逃げ遅れる人々 東日本大震災と障害者」

URL : <http://www.j-il.jp/movie/>

自己紹介

JDF被災地障がい者支援センターふくしま 事務局 設楽 俊司

前職：自立生活センター「I.Lセンター福島」所長として、自立支援、障がい者にも住みやすい街づくりへの提言活動、ユニバーサルアパートの建設・運営などに携わる。

JDF被災地障がい者支援センターふくしまの活動

- 2011年4月6日設立
- JDF（日本障害フォーラム）を頂点に全国の障がい者団体からの支援。
- 県内の全障がい者団体が構成団体。
- 被災障がい者の相談支援。
- 福祉事業所拠点整備事業。
- 福祉従事者マッチング事業（2012年度まで）

避難所での障がい者の状況

震災当初の活動

救援物資運び・避難所の障がい者探し

重度の障がい者が一般の避難所にはいなかった。

一般避難所では、障がい者が避難生活が出来なかった。

- 身体障がい：トイレにも行けず、垂れ流し状態。
- 視覚障がい：人の足等を踏んづけてしまう状態。
- 聴覚障がい：原発避難の際、何故避難をしているのかが解らなかった。
- 知的障がい：多動等で、大勢の中は無理。車の中でという状態。

障がい者は、一般の避難所を選択肢に入れてなかった状況。

避難所の在り方

一般避難所＝公共施設なので、UD化しておくべきである。

- 学校のバリアフリー化
 - 普段から障がい児も一緒に学べる環境の整備が必要である。（インクルーシブ教育の推進）
 - 体育館だけではなく教室の積極的利用も必要である。
- 福祉避難所として、ホテル等を積極活用すべき
 - 客室をプライベートスペースに。大浴場やUDトイレ等を完備してもらう。暖かい食事の提供。
 - 県内や隣県ホテル等に提携協力を願い、指定してはどうか？
 - 障がい者個人宅がBF設計で建てられた家に、数名を非難させて頂くという協定を結ぶという方法はどうか。
- 福祉避難所を整備するだけで良いのか？
 - 普段から医療的ケアが必要な方等では、福祉避難所の推進は必要である。
 - しかし、障がい者だけに分けられることはどうなのか？

インクルーシブな社会の実現といった環境整備が必要である。

災害時だからこそインクルーシブ社会へ

注) インクルーシブ・インクルージョン
分け隔てなく、誰にも有益な共生（包括的）社会、状態。

- 災害復興時のインクルーシブな街造りへの提言。
 - 大規模震災時こそ、インクルーシブな考え方が必要であるということに判明した。
 - 震災復興時には、インクルーシブな街造りや考え方が必要であることを提言して行く。

インクルーシブな社会の必要性

- 当事者（要援護者）の方々へ
 - 地域生活をする障がい者は、普段から、せめて両隣との付き合いをする。当事者がそうしようとしても、受け入れ難い環境がある。
- 一般市民の方々へ
 - 近所に要援護者がいるかどうかという関心を持って欲しい。
 - 自助や共助といった部分では、住民の障がい者に対する理解を進める必要がある。

福島特有(原発災害)の課題

- 福祉従事者の確保。
 - 未だ、16万人が避難している中、労働者年代の人口流出が多く、福祉従事者の確保が、大きな課題となっている。何らかの策を模索中。
- 地域をまたいでの避難を強いられている。
 - 原発災害により、地域をまたいでの避難を余儀なくされている。福島県土は広いので、県内にも福祉だけではなく、風習、気質などの地域間格差がある。
 - 知的・精神などの方は、特に環境適応能力が低く、その支援が課題。
 - また、原発立地地域は比較的地域福祉の社会資源が少なかった。福祉資源が少ない中で、畑仕事や近所の助け合いといったことで、何とか生活が成り立っていたというボーダーの方が、環境が変わったことにより、支援が必要となるケースもある。
- 原発事故による差別や人権侵害の擁護活動。
 - 原発事故により、福島人差別や人権侵害。何らかの障がいを持って生まれる子の出生確率が増すと思われる。その擁護活動を行う。

震災復興時の社会インフラ整備

復興＝普及ではなく、震災以前よりも誰もが使いやすい街に作り変える必要がある。ユニバーサル度の高い街にしていかななくてはならない。

- 情報伝達インフラ整備
 - 言語＝言葉だけではない。多言語化（手話・識別記号など）が必要。防災無線などの多言語化に向けた技術開発。
- インターネットの積極的利用
 - 地図ソフトやナビゲーションシステムに避難所や寸断道路、浸水地帯の表示。
- 廃炉・除染技術の開発・向上
 - 廃炉ロボットなどの開発など、日本の技術力に期待したい。

関連情報

- JR大船渡線・気仙沼線の代替交通BRT（バス高速輸送システム）について

【対応事実】

- ✓ 基本低床バスであるにも関わらず、車いすでの利用は、「2日前に連絡下さい」とのこと。

【これまでの交渉の際に】

- ✓ お金がないので（経済的理由）低床バスを導入出来ない。

【問題提起】

- ✓ ハード的にはそろっているのに、経済的理由にはならない。
- ✓ 対応出来る職員が少ないのか？→職員研修の強化。
- ✓ 移動困難者である私たち車いすユーザーにこそ、即時利用の権利があるのではないか？
- ✓ 利用頻度が少ないといった理由なのか？
- ✓ 旧態依然とした障がい者差別の構図が伺えるのではないか？
- ✓ 障害者差別解消法が25年6月に成立、障害者権利条約を批准した我が国のあるべき姿なのか？
- ✓ 福祉レベルの地域間格差の解消を計っていかなければいけない。
- ✓ 震災を期に、新しい価値観も同時に育って行くことを願う。

第10回 交通バリアフリー推進勉強会 東日本大震災と被災地の障害者

小山 賢一
みやぎ盲ろう児・者友の会

〈見え方・聞こえ方〉

①見え方

右目は光を感じる程度。

左目は上と左側の視野がなく、右上から真ん中にかけても見えない部分がある。

真ん中の少し右側の小指の爪くらいの部分と、真ん中左側の部分の視力を活かして生活している。

②聞こえ方

両耳ともに先天性の感音性難聴で、中程度の難聴。

左耳に集音器を装着する場合あり。

震災発生時の状況

- 自宅は海から直線距離で200m程度。
-
- 大地震の発生時は、一人で自宅の部屋にいた。
- 部屋では激しい揺れがなかなか収まらず、動くことができなかった。建物が倒壊するかもしれないような揺れ方が長く続いたので「このまま(私も)終わってしまうのかなあ。」という気持ちになりながら耐えた。とにかく、これでもかというくらい容赦なく揺れた。
まるで大地が怒り狂っているかのようなようだった。
- 地震発生直後に停電し、防災無線も入らず、固定電話もつながらず、携帯電話も不通。
ラジオでさえも電波の届きにくい環境で使えない状況だった。

3

避難①

- 地震や津波に関する情報がないなかで、避難に向けて動いた。
- 過去に何度か津波の経験がある地域で、防災訓練は子供の頃から地震と津波のセットで行われていた。
- あれだけの尋常ではない揺れ方で、津波の経験のない私でさえ、このあとに津波がくることは間違いないと直感した。
- ただし、実際の津波の規模や到時刻などは想像できなかった。地震発生からどれくらい時間が経過していたかもわからなかった。

4

避難 ②

- 私が視覚障害者であることは地域の方々は知っていたので、地域の消防団の方が見回りにきてくれたと後から聞いた。しかし難聴のため、呼び掛けが聞こえず、すれ違った可能性がある。
- すぐ裏山は避難場所にもなっていたが、その先は山が荒れているため、一人での避難は困難と判断し、歩いて10分はかからないくらいの安全なルートから避難所になっている保育所への移動を考えていた。
- 揺れが一時的に収まったタイミングで避難しようと外に出た時、父が車で迎えに来てくれた。
- 一人で避難していたら津波到達までに間に合ったかどうかわからない。

5

津波

- 高台に避難しても大きな揺れは何度も続いた。
- 私が避難して間もなく大津波が地域を襲った。
- 津波目撃者が興奮した様子で「全滅！」を何度も連呼していた声や姿は今も脳裏に焼き付いている。
- まさかの夢のようで、全く実感がなかった。
- 自宅は土台のみを残して庭の木も含めて全壊流失。
- 15mとも言われる大津波は近くの小学校の屋上にまで達した。
- 押し寄せる津波は、じわりじわりと浸水するようなものではなく、まさに襲うように直撃した。
- 第一波よりも第二波、第三波の方が凄かったと目撃者から聞いた。
- 漁港の堤防は跡形なく崩壊し、国道の橋まで津波でもっていかれた。

6

避難所生活①

- 避難所になったのは、その年の春に新しく移転開所予定だった高台にある保育所。
- 高台に避難した時から雪が降り、とても寒かった。
- 震災発生初日は、100人以上の避難者が集まった。自宅が助かった人も余震の危険、安否確認、ライフラインが使えなくなったため、津波から難を逃れた人はみんな集まった。
- 避難所の耐震は震度7にも耐えられると聞いた。
- 徐々に人が増えて、多い時には200人を超えていたと思われる。
- 私の地域で助かった民家は、高台にあった約40軒。
その他の50軒くらいは被災・流失した。
- 震災発生から一夜明けて、津波に襲われた地域はがれきしかなく、まるで戦争で爆撃を受けて崩壊したような凄まじい光景だったと伝え聞いた。
- 道路も寸断され、安否確認や地元に戻るにも徒歩だった。

9

避難所生活②

- ライフラインがストップしたなかで、私たちの命をつないだのは山水だった。山水を避難所に引いて使用した。
- ドラム缶を確保し、山から木を集めてお湯を沸かしたりしていた。
- 時間の経過とともに食料以外の日用品、衣服など、支援物資が届くようになった。何かが満たされると、やはり人間というのはそのことが当たり前感覚になり、満たされないものが気になった。
普通の衣食住ができるようになるまで、そんな感覚は続いたように思う。
- 食事ができる、箸や食器で食べる、畳や居間に座る、歯磨き、洗髪、入浴、着替え、布団での就寝、プライベート空間、お湯を使ったり飲む、電気、水道、ガス、電話、テレビ、日常にある、あげたらきりがないうあたり前のものが一つ一つ幸せなことだということを身に染みて感じながらの避難所生活だった。

10

避難所生活で視覚障害者、盲ろう者、 障害者として困ったこと

- ①自力での移動困難。
- ②トイレの不自由。(移動・利用が困難)
- ③水が自由に使えない。
- ④一日中同じ場所に座ったまま動けない。
- ⑤周りに助けを求められない。→遠慮、気遣い、状況認識できない。
- ⑥手が自由に洗えない。
- ⑦連絡が取れない。
- ⑧情報が得られない。
- ⑨日常の感覚を失い、何が必要か、欲しいかも分からなくなる。
- ⑩プライベート空間がない。
- ⑪周囲の目が気になる。→みんな極限状態で大変な時に自分だけという心苦しき、迷惑かけてしまう気持ちとの葛藤。

11

避難所生活で救われたこと

- (1) 近くの高台の完成したばかりの保育所が避難所になったこと
- (2) 水があり、自然を活用できる人材と技術、環境があったこと
- (3) 津波被害のない集落があったこと
- (4) 震災発生時期→夜中・真冬・真夏だったら、状況は大きく変わる
- (5) 桃生町から作業に来ていた土木会社がガソリン発電機を持っていたこと
- (6) 食が継続できたこと
- (7) 私が障害者であることを知っている人が多かったこと
- (8) 家族の無事と支えてくれる人がいたこと
- (9) 自宅近くの土地勘のある場所で避難所生活ができたこと
- (10) 友人や知人が気にかけて声をかけてくれたり、支援してくれたこと
- (11) 食料調達が難しい中、偶然にも私の誕生日にケーキの差し入れが届いたこと
- (12) 近くの民家に災害時に有効な汲み取り式トイレがあったこと
- (13) 発電機と井戸水で入浴させていただいたこと

多くの方の支えや地元の環境の中、避難所生活を無事乗り切ることができた

12

震災後の生活

- 約2ヶ月半以上にも及ぶ避難所生活後は、目が不自由でも感覚で移動ができた地域での生活環境を失い、引っ越し後は自宅から一人では出られなくなった。
- 自宅にいたりの生活は、もちろん家族に支えられながらも、外に出る目的すら失いかけていた。
- 友人・知人とも離れ、交流の機会が激減した。
- そんな時、仙台市にある仙台市中途視覚障害者支援センターと出会い、相談をして、そこから様々な情報をいただき、仙台にある職業訓練校でパソコン訓練を受けた。点字も習い、視覚障害者仲間とも出会い、今もお世話になっている「被災地障がい者支援センターみやぎ」との出会いから、またいろいろな情報を得て、福祉サービスや社会資源を利用しながら活動がさらに充実してきた。拡大読書器の支援のおかげであきらめていた活字情報を再び見るできるようになった。

13

移動環境について

- 今現在、仙台を中心に活動しているが、一番大変なのは移動手段、交通の便が悪いこと。
- 住民バスでは時間が合わず自由に往復ができない。
- 僻地で過疎化が進む地域に住み、震災後の環境変化で、車での移動でないと自由がきかない。
- 近くに頼る知人も少なく、バス停は比較的交通量が多い、歩道のない道路の2km先にあるため、一人では行けない。
- 自宅から石巻駅へのタクシー利用は、片道35km、1時間近くかかり費用負担も大きく利用できない。
- 石巻駅からの鉄道(仙石線)もまだ全線復旧していない。途中、バスへの乗り換えも必要。
- 自宅から2時間以上かけて仙台に出ると交通網や福祉環境が整備されていて単独で移動ができる場所もある。
- 地元では目的地に到着し、そこからまた離れるには、車が必要。

14

今後の活動

就職活動をしながら、盲ろう者としても「みやぎ盲ろう児・者友の会」の活動や点字訓練・情報機器の勉強、宮城県
の福祉について学び、
活動の幅をもっと広げていきたい！

15

参加者のみなさまへ

震災だけでなく、日常においても自然災害は、いつ、どこで発生するか予測は困難です。

そのなかで視覚障害者は移動と情報取得、聴覚障害者は音声情報とコミュニケーション、盲ろう者は移動・コミュニケーション・情報取得、車椅子利用者は特に移動が自力では困難です。そのような方が皆さんの周りにいないかどうか、障害者の存在を知ってください。また関わる機会があれば一人でも少しでも関わってください。

障害者の避難には、やはり車は特に強力なアイテムです。移動のバリアフリー化についてアイデアをどんどん出し、私たち障害者の移動におけるバリアフリー化がもっと社会に広がるよう、ご支援とご協力をお願いします。

16

参考資料

1 アンケート結果

①勉強会を何でお知りになりましたか？

有効回答数 73

当財団ホームページ	10
学会等メーリングリスト	23
関係者から直接	23
その他 (知人、過去の参加者、ゼミ 等)	17

②今後、開催してほしいテーマや課題はありますか？

- ・ 障害者スポーツ／パラリンピックに関するテーマ
(組織運営や競技場、移動などについて)
- ・ 情報バリアフリーに関するテーマ
(技術開発などについて)
- ・ 観光バリアフリー／ユニバーサルツーリズムに関するテーマ
(観光地の取組みや考え方などについて)
- ・ トイレに関するテーマ
(使いやすいトイレ設計について)
- ・ バリアフリー化された施設の設計 (実例) に関するテーマ 等

③勉強会についてのご感想をお聞かせください。

- ・ 発達障害という定義自体がまだ未確定な感じがする。また、ロボットと人間の関係性 (位置・立場など) も手探り状態であると思われる。今日のテーマはこの両課題を包含せざるを得ないので、今後の大きな必須問題となると感じた。
- ・ 内容は少々難しかったが、障害に対してこのようなアプローチもあるのかと勉強になった。

(以上、第6回勉強会アンケートより抜粋)

- ・ 逆転の感覚というか感性というか、新しい状況を知ることができた。今後も発達障害、心因的なテーマについて引き続きお願いしたい。
- ・ 他の障害についても言えるコトだが最終的には個人差が大きい

コトが一般認識から抜け落ちていると感じた。
(以上、第7回勉強会アンケートより抜粋)

- ・哲学とマニュアル両論で動かしていく必要性など参考になりました。
 - ・昨日、実際に聴覚障がいの知人とディズニーランドに行って予習してきました。更にその意味もわかりよかったです。
 - ・自分でバリアフリーについて考えることよりも自分の知らない世界の人に話しを聞くことで新しい発見ができることを知りました。良い経験ができたと思います。
- (以上、第8回勉強会アンケートより抜粋)

- ・エレベーターやトイレの位置は、動線を考えるだけでは、本当に必要な人に提供できないというのは盲点でした。また、交通に関して、道路を計画、設計に携わる身として、わかっている国や県、市を動かせない部分もあります。もっと知識をつけ、提案していけたらと思います。
 - ・便利すぎると不正利用を生み、切実に必要な人が使えないという点に大きな問題を感じました。
- (以上、第9回勉強会アンケートより抜粋)

- ・大変参考となった。映像と当事者の体験談により、具体的なイメージが持てたので、今後の業務に活かしていきたい。
 - ・障害があるため他の人に迷惑をかけるという気持ちから避難所に行かないという話がとても印象的でした。
- (以上、第10回勉強会アンケートより抜粋)

平成 25 年度（上半期） バリアフリー推進ワークショップ

第 1 回 平成 25 年 4 月 26 日（金）

テーマ 内照式 LED サインの問題点と課題

第 2 回 平成 25 年 5 月 17 日（金）

テーマ 音サインの標準化と今後の課題（視覚障害者の誘導）

第 3 回 平成 25 年 5 月 30 日（木）

テーマ 航空機のアクセシビリティの現状と課題について

第 4 回 平成 25 年 7 月 3 日（水）

テーマ 障害者差別解消法の動向

第 5 回 平成 25 年 8 月 8 日（木）

テーマ 情報通信技術を活用したバリアフリーな移動

なお、上記については別冊となっております。

ただし、下記 URL のホームページにて公開しております。

http://www.ecomo.or.jp/barrierfree/benkyo/benkyo_top.html

平成 25 年度（下半期） バリアフリー推進ワークショップ

平成 26 年 3 月発行

公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団

〒102-0076 東京都千代田区五番町 10 番地 KU ビル 3F

電話：03-3221-6672（代表）

FAX：03-3221-6674

無断での転載および複製はお断りします

